

2. 自然史系博物館におけるワークショップ

1) プログラム開発の経過

大阪市立自然史博物館でのワークショップ開発は2002年から2004年にかけて行われた大阪自然史センターとの共同事業、科学系博物館教育機能活用事業（文部科学省委託）にさかのぼる。この事業の中で、これまで友の会を維持発展させ、またミュージアムショップ事業の核であった特定非営利活動法人 大阪自然史センター（現 認定特定非営利活動法人 大阪自然史センター、以下単に自然史センターと記す）に学校や子ども向けの教育プログラムを開発する「教育スタッフ」を配置したことがワークショッププログラムの重要な起点となっている。これまで、学芸員による自然史博物館の教育プログラムは植物学や昆虫学といった「課題中心」であり、それを対象学習者に合わせてアレンジするという流れであった。しかし、教育スタッフの導入により「学校が博物館を活用するためにはどのようなプログラムが求められているか」、「この展示のメッセージを子どもが受け取れるのにはどういう展開がありえるのか」といった教育対象側から組み立てを考える「学習者中心」の発想が行えるようになった。学校向けの来館体験の改善を中心としていた初期の取り組みに次いで、一般来館者向けのプログラムとして「子どもワークショップ」を企画立案した。

最も初期に行ったのは2004年7月から9月にかけて開催した特別展「貝の不思議」に関連して実施した「こどもぷろぐらむ『貝であそぼう』」である。これは「あなたの貝のびっくりカード！」（会場内から自分で貝を選んでスケッチしてつくとび出すカード作り）、「夏の砂場のミニミニ貝」（海や川の砂から微小貝を探し同定する。砂を切り口に貝の住む場所を考える）、「貝の穴 たんてい団」（食痕、碁石やアクセサリ加工の跡など穴の空いた貝をキーワードに殻の重要性を伝え、ペンダント作りをする）の3つのプログラムを期間ごとに替えながら会期中の土日祝に、一日4回実施した。「展示を見て、話を聞いて理解を深め、それを工作などの作業で定着させる」というプロセスのものであった。各回25人定員の有料プログラムながら特別展入場者の10%を超える延べ989人の参加を得た。



初期のワークショップの様子（2004年貝展）：手前の女性が教育スタッフ。画面奥に学芸員が導入を見守り、質問が振られるのを待っている。

この成果を受けて常設展向けのプログラム開発を行った。「くらべて木の実」（2004年11月実施）、「冬のたからもの」（同12月実施）など、博物館周囲の植物園と博物館の展示を結

びつけることを狙ったものであったが、その後は次第に展示物や標本を活用する形へと転換していく。学芸員は講義をするのではなく、間に答えて発見を促す立場、見たものを理解へと導く立場になる。教育スタッフが子どもたちの視点をしぼっていく場としては展示物の中のほうがやりやすい、という事もあったと思う（詳細は中原 2009）。子どもたちの興味を刺激し、観察へと促すのは教育スタッフの役割である。これらの試行の後、2005年4月からは毎月定例のプログラムとして開始され、現在に至る。この間に開発されたプログラムは50を超える多彩なものとなっている。2015年12月から1月にかけて、これらのプログラムをレビューする形で大阪市立自然史博物館において「ワークショップ展」を実施している。



2015年12月から2016年1月に開催したミニ展示「しぜんしワークショップ展」の様子：過去の小道具などを展示し振り返った。

2) 大阪市立自然史博物館でのワークショップでの留意点

大阪市立自然史博物館でのワークショッププログラムの運営は現在も前述の通り、自然史センターで有償雇用された教育スタッフが担っている。これは、学芸員と責任分担をして進めるために必須の体制である。なにもないところから新規のポストを確立するために、自然史センターには多くの努力を頂いている（道盛 2013）。

プログラム立案上の留意点は様々なポイントがあるが、「展示を見て、話を聞いて理解を含め、それを工作などの作業で定着させる」というプロセスを基本にしている。1) 最も低年齢の参加者向けの事業であること。2) 展示品に込められた学芸員のメッセージを届けるプログラムであること。3) 学芸員や標本など、特別感の演出。4) さらに参加した人には受け取ったメッセージを家族や友達にも届けてもらえるよう、成果品などを工夫している。アクティブ・ラーニング的要素も取り込んでいる。

展示室の状況に合わせた立案・実施という配慮も重要である。配慮すべき内容は観客の動線や大人の鑑賞、安全配慮など数多い。野外行事同様、1) 入念な計画と下見 2) 参加者への十分な周知 3) 適正な参加者数とスタッフ配置 4) 適切な保険など 5) 反省と情報共有のプロセスを大事にしている。ワークショップの人气が定着すると、繁忙期には人数限定のワークショップでは定員超過などでトラブルが起こる例がある。このため、学芸員が介在しじっ

くりストーリーを追うタイプのワークショップは比較的閑散な時期に実施し、ゴールデンウィークやお盆前後などの来館者総数が多く、リピーター率が下がる時期には、内容はライトでもより多くの子どもが体験できるプログラム提供を心がけている。

これらプログラムの立案と実施は教育スタッフ任せではなく、学芸員と教育スタッフのやり取りの中で組み上げられていく。課題やメッセージをわかりやすく発信することを担う学芸員と、子ども（教育対象）側に寄り添い、そのうけとめをモニタリングし、時にともに学芸員に問いを発する教育スタッフという役割分担ができることによって、学芸員だけでの実施から参加者への魅力づくり、という点でも、その結果の満足度としても大きく向上した。

3) 美術館での「ワークショップ」との相違点

自然史系博物館に先立って美術館はより広い、様々な形の「ワークショップ」を実践してきている。様々な創造活動やインスタレーション、街づくりへの参加などを含む広い意味で使われてきている（東京パブリッシングハウス・目黒区美術館 2009）。内容が多様であることもあり、一概には言い難いが、美術館のワークショップが表現・創造活動を通じての気付きを重視し、学習環境としての美術館の意義はしばしばそれほど重要でないことがある。一方現在の大阪市立自然史博物館ワークショップは、創造活動自体よりも主題としての展示物や標本への気付きや理解、あるいは学芸員が重要になり、「博物館だからこそ」のワークショップをより重視しているのかもしれない。また、自然史系では主題の関係からか、参加児童のみならず保護者にも男性が多いことは大きく異なる点であろう。ワークショップを通じて、参加児童だけでなく親の気づきを促すことが多いのはどちらも同様であろう。

3. 館外へ展開するワークショップ

自然史の子どもワークショップは、自然史センターが高槻市立芥川緑地資料館（現高槻市立自然博物館）の指定管理者となったことに伴い、同館へ技術移転される。一つの博物館での専用プログラムであった段階から、アレンジを経て他館で実施する汎用性を持ち始めたといえる。同様に、自然史センターから独立したワークショップユニットが実施する「ちゃめっこはくぶつかん」（<http://chameco.net>）は京都を中心に博物館外での活動を試みている。同様に、自然史センターも博物館から活躍の場を街中（上田・五月女 2013）や病院（犬飼ら 2013）、さらには東日本大震災の被災博物館へと広げている（西澤 2012）。こうした活動においても、学校貸出用などの標本を会場へ持ち込み、また被災地においては地域の重要な自然資源を題材にして（例えば三陸であればウタツギヨリユウ、アンモナイト、黒松、鳥羽源蔵など、現地関係者への取材と協力のもと教育スタッフと学芸員が咀嚼し）ワークショップを組み立てている。ここでも、実物標本と学芸員など専門家の存在はプログラムに参加者との対話で掘り下げや将来のより高度な学習につなげる示唆の提供を可能にし、工作イベントとは大きく異なる圧倒的な深

みを与えることができる。これらの社会展開は自然史センターへの寄付や、会場など主催者側の負担などにより実施されている。

美術館とともに展開される街づくりなどのワークショップ同様、博物館から社会へ展開していくワークショップは社会の中に自然史科学を広げていく大きな可能性を持っている。社会に求められて展開しているという点において、博物館の負担で行われるアウトリーチを越え、社会実装へとつながっていく道が開かれていると考えている。

子どもたちにはイベントの楽しさを提供するとともに、実物の魅力や地域の自然史の価値に触れ、ワークショップの体験でそれを定着させ、小さな自然科学者となってもらいたい。こうした理想を社会の隅々まで展開していくためにはこうした展開は欠かせないだろう。自然史博物館と学芸員はその時、コンテンツ（ストーリーと実物）の供給源としてより重要性を持つだろう。

引用文献

- 犬飼岳史・高橋真理子ほか 2013 小児科病棟における地域博物館との連携による出張ミュージアムの試み 日本小児血液・がん学会雑誌 50 (4)
- 上田裕子・五月女草子 2013 NPO 法人大阪自然史センターの出張ワークショップ～博物館を飛び出して～ Musa 博物館学芸課程年報 27:13～18
- 江水是仁 2010 博物館におけるコミュニケーション研究の課題. 電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎 109 (457), 13-14
- 大阪自然史センター, 大阪市立自然史博物館編集 2003 「学校」・「地域」と自然史博物館:平成14年度文部科学省「科学系博物館教育機能活用事業」のとりくみから.
- 大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター 2009 「自然史博物館」を変えていく 高稜社書店
- 坂本昇, 角正美雪, 川人よし恵 2012 0-2 歳児対応充実のために:伊丹市昆虫館での調査から博物館研究 博物館研究 47 (9), 21-23
- 東京パブリッシングハウス・目黒区美術館 編 2009 美術館ワークショップの再確認と再考察:草創期を振り返る. 富士ゼロックス, 東京
- 中原まみ 2009 2-4 次のサービスへ —「子どもワークショップという」語りの模索—「自然史博物館」を変えていく (大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター編 高稜社書店) 74-80
- 西澤真樹子 2012 なにわホネホネ団の東北キャラバン実践報告「きょうは1日、化石であそぼ!」～博物館コミュニティによる被災園館支援の可能性をさぐる～ ミュゼ 99:20-21
- 布谷知夫 1979. 3. 自然史系博物館 (倉田公裕編 博物館教育と普及):175-187. 雄山閣出版, 東京
- 道盛正樹 2013 NPO 法人大阪自然史センターのスタッフキャリアについて Musa 博物館学芸課程年報 27:7～11

